栽培基礎講座

短節間性かぼちゃ新品種「栗のめぐみ１号」の特性と栽培上のポイント

国立研究開発法人　農研機構
北海道農業研究センター　寒地水田輪作研究領域　複合経営グループ　上席研究員　嘉見大助

かぼちゃは、北海道をはじめ鹿児島県、長野県、茨城県など全国で広く栽培されており、北海道では春まき栽培が中心であるが、本州および九州・沖縄の産地では早熟作型（本州に代表される中間地は２～３月播種、６～８月収穫、九州･沖縄に代表される暖地は12～２月播種、４～７月収穫）や抑制作型（普通作型よりも遅らせて栽培、中間地は８月播種、11～12月収穫、暖地は９月播種、12～１月収穫）による栽培も行われている。主要品種の多くはつる性であり、栽培中につるが伸長するため、整枝作業を必要とする。加えて、茎葉が繁茂するため、収穫時に茎葉をかき分けて果実を探す作業が大きな負担となっている。この負担を軽減するために農研機構 北海道農業研究センターでは、かぼちゃの短節間性に着目し、1996年から短節間性かぼちゃ品種の育成に取り組んできた。

このような経緯のなかで、朝日アグリア㈱との共同育成により「栗のめぐみ１号」（品種名：「豊朝交１号」）を育成した。ここでは、「栗のめぐみ１号」の育成経過、品種特性および栽培のポイントを紹介する。

短節間性の花粉親品種×着果性に優れる種子親品種

「栗のめぐみ１号」は、農研機構が開発した短節間性の花粉親品種「北海８号」と朝日アグリア㈱が開発した着果性に優れる種子親品種「親Ｇ」を2017年に交配して得られたF1品種に由来する。このF1品種について、栽培試験を行ったところ、短節間性があり、株元着果性が優れていることが確認されていることがわかったため、品種登録出願を行った（品種登録出願番号：第36360号、2022年７月12日出願、2022年11月17日出願公表）。品種名である「豊朝交１号」の名前は、札幌市『豊』平区にある農研機構 北海道農業研究センターと『朝』日アグリア㈱で共同育成した品種であることに由来している。しかし、この品種名では、かぼちゃをイメージすることが難しいと考え、このかぼちゃが栗を思わせるホクホクとした食感であることから商品名を「栗のめぐみ１号」とした。

つるが伸びにくく株元に着果しやすい品種

「栗のめぐみ１号」の品種特性を表１に示した。「栗のめぐみ１号」における雄花の開花時期（定植してから開花までの日数）は、「えびす」（標準品種）や「ジェジェＪ」（対照）とほぼ同等であるが、雌花の開花は「栗のめぐみ１号」が早い傾向にある（表１）。「栗のめぐみ１号」のつる（主枝）の伸長は、生育初期から中期にかけて（定植から１ヵ月程度）ゆっくりと進むため、節間が詰まった草姿になるが、生育中期以降になると徐々に主枝が伸長して、収穫期にはつる性品種と同様の草姿となる。しかし、「栗のめぐみ１号」では、つるが伸び始める前に開花･受粉するため、「えびす」に比べると株元に近い位置で着果する。この傾向は先に品種登録を行った「ジェジェＪ」とほぼ同様であるが、「栗のめぐみ１号」の方がその着果位置が株元に近い（表１）。そのため、収穫期の果実は畝（マルチ）上に着果しているものが多く（写真１）、果実を見つけやすいことから、収穫にかかる作業時間の短縮が期待できる。収穫は開花後45～50日くらいを設定しているが、この頃になると、株元付近にある茎葉は、老化や病

表１　「栗のめぐみ１号」の品種特性*

品種・系統名	定植から第一雄花開花日までの日数	定植から第一雌花開花日までの日数	１m以内に着果している株の割合(%)	１m以内の着果株の着果距離(cm)	果実重量(kg)	果肉糖度(Brix%)	果肉乾物率(%)
栗のめぐみ１号(短節間性)	37.1	36.8	100.0	18.6	1.4	12.7	18.7
えびす(標準品種：つる性)	37.9	38.0	59.4	77.3	2.4	11.1	13.0
ジェジェＪ(対照：短節間性)	36.9	40.4	93.2	46.3	2.1	11.5	18.8

＊：2025年度の値を示し、３反復(10株/反復)の平均値
令和７年５月８日：72穴セルトレイ播種、５月23日：定植、８月26：収穫
Ｎ：Ｐ：Ｋ＝８：８：０kg/10ａ
黒色マルチ栽培、畝間３ｍで株間35cmとしたが、「えびす」のみ株間60cmで設定した



写真１　収穫直前の「えびす」(左)と「栗のめぐみ１号」(右)の果実(矢印は果実を示す)

気により枯れ始めて果実の直射日光が当たりやすくなり、日焼け果実を発生させることが多くなる。そのため、圃場内に放置せず、適期に収穫すること、または収穫前に後述の日焼け対策を講じることが重要となる。

扁円型で食味に優れるかぼちゃ

「栗のめぐみ１号」の果実重量は、「えびす」や「ジェジェＪ」よりも小玉傾向になりやすい（表１）。果実の形は「えびす」や「ジェジェＪ」と同じく扁円型で、果皮は全体が黒緑色をしており、淡緑のすじが入る（写真２）。

果実の内部をみると、「栗のめぐみ１号」の果肉色は濃黄～橙黄色であり、果肉糖度は12度以上で甘みが強く、果肉乾物率は18.7%であった（表１）。果肉乾物率は、食感の指標となる値で、「えびす」が粘質（ねっとりした食感）であるのに対して、「栗のめぐみ１号」は粉質（ホクホクした食感）である。ただし、収穫後２ヵ月を過ぎると、粘質の食感に変化するので、収穫後は２ヵ月以内に消費することが望ましい。



写真２　淡緑のすじが入った「栗のめぐみ１号」の果実

栽培上の留意点

「栗のめぐみ１号」は、国内のかぼちゃ産地における早熟作型ならびに普通作型の栽培に適している。うどんこ病に対する抵抗性は既存品種並みであるため、適切なうどんこ病防除が必要である。前述したように収穫前に葉が枯れ上がると果実の日焼けが発生することがあり、外観品質の低下や圃場内での果実腐敗増加につながるので、収穫前に果面を新聞紙で覆う、または日焼け対策用のテープを貼るなどの対応を勧める。

今後の展望

「栗のめぐみ１号」の栽培用種子は2023年１月から販売が開始されており、2025年度では九州・沖縄を中心に約50ha普及している。従来品種よりも株元近くに着果し、かつ着果位置が揃うことから果実が見つけやすく、収穫作業の軽労化が期待できることから、省力的に栽培したいかぼちゃ産地での普及が見込まれる。

●種子の入手に関する問い合わせ
朝日アグリア㈱ 種苗部
TEL 0274-52-6304　FAX 0274-52-4534
URL https://www.asahi-agria.co.jp
（二次元コード①：朝日アグリア㈱）
https://www.asahi-agria.co.jp/news/detail/156
（二次元コード②：「栗のめぐみ１号」種子販売）

二次元コード①　二次元コード②